

繰り返しと情報構造

稲 木 昭 子

Principles of Discourse Repetition

Akiko INAKI

0. は じ め に

私達はことばのやりとりにおいて、対話相手あるいは時には自分のことばを繰り返すことがよくあるが、その機能については、次のようにまとめることができるであろう。繰り返すことによって、まず基本的には話の流れが話し手聞き手双方に明瞭になる。さらにことばの（意味）内容そのものを問題にしたり、あるいはことばそれ自体に焦点をあてることもある。さらにその繰り返したものに、話し手の心的態度、評価を含意させて、対話相手に提示する。ところでこの繰り返されるものは、なんでも可能というわけではない。ここでは、繰り返されるものに関する原則を考え、さらにその原則と繰り返しの機能との関係について考えてみたい。

久野（1978：7）は、省略の主な目的を、言わなくても聞き手にとって自明のインフォメーションを省くことによって、文の冗長度を下げることでありと説明する。そうすると逆に繰り返しは、文の冗長度を上げることになるが、これだけでは繰り返しの問題は片付かない。繰り返しは根本的には談話上の問題であり、談話のなかにでてくる文の各構成要素の表わす情報の内容を手がかりに考えてみるのが、大切であるように思われる。

ここでは久野の省略順序の制約を参考にして、繰り返しの順序の原則を仮にたて、これを繰り返しできない文例にあてはめて、原則を修正する。さらに実例にあてはめて、繰り返しの機能との関係について考えてみることにする。

1. 久野の省略順序の制約

久野（1978：15）は省略順序の制約を次のようにたてる。

繰り返しと情報構造

省略はより古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素から、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素へと順に行なう。即ち、より新しい（より重要な）インフォメーションを表わす要素を省略して、より古い（より重要度の低い）インフォメーションを表わす要素を残すことはできない。

ここでの重要な情報とは何を意味するのであろうか。いわゆる情報には、新情報（new information）と旧情報（old information）があるが、これらを簡単に定義すれば、聞き手があらかじめもっている知識が旧情報、話し手が新たに付け加える知識が新情報ということになる。私達が情報を伝達するときには、情報が効率よく相手に伝わるように、文を作り、その配置をしなくてはならない。普通、聞き手にある程度の予備知識があることを前提にして、それに積み重ねるような形で新しいことがらを伝えていく。そこで、話し手は聞き手がその予備知識を活用して新しい知識を受け入れやすいように、文または談話を組み立てる。このような点から談話の構成を考えると、ある文の旧情報を表す部分は前の文にできるだけ近いところ、通常主語のところに現れるのが最も自然である。したがって新情報の方は文末にくることになる。多くの場合、文強勢が文末の語に置かれることから、文末が基本的に聞き手の注意をひきつけやすく、話し手が最も伝えたいことを述べるのに適した位置といえる。このことから無標の情報構造は、旧から新へと流れることになる。

しかし常に、一つの発話のなかに、新・旧情報があるわけではない。時には新だけの場合、あるいは旧だけの場合もおこりうる。つまり情報構造としては、新・旧まじったもの、全て旧、全て新の3通りが考えられることになる。また伝達する情報には重要なものと、それほど重要でないものの区別分けも可能である。そこでこの重要度と新旧の関係を考えると、旧情報に比べて新情報の方が重要であることは自明である。新情報は話し手がその文を使って聞き手に初めて伝える情報であるので、情報の価値からいけば、当然より重要となる。さらに新情報のなかでも、より重要なものとそうでないもの、旧情報のなかでも、より重要なものとそうでないものを区別することができる。したがって、さきほどの無標の情報構造は、より正確には、より重要な情報をもつ部分を文の後部に置くのが自然ということで置き換えられる。

2. 省略から繰り返しへ

Kuno（1983：33，35）の省略に関する例文を借用して、繰り返しについて考えてみることにする。

(1) Lots of people have abandoned their cars. John commutes to his office on foot,

and

- a. Bill commutes to his office on foot, too.
- b. Bill commutes ϕ on foot, too.
- c. # Bill commutes to his office ϕ , too.
- d. # Bill commutes $\phi\phi$, too.

a-d はどれも、Bill と too だけが新情報で、残りは全て旧情報を担っている。前文の commutes, to his office, on foot のいずれが繰り返されているかで適格、不適格かをみると、a は全部繰り返され、b は commutes, on foot が繰り返される。文の後半は、いわば How do Bill and John commute to their offices? に応答する文に相当し、この文の焦点は on foot になる。そこでこの on foot が最も重要な情報となる。on foot は to his office の右にあり、その分 on foot がより重要な情報を伝えていることになる。その重要な情報を繰り返している文は適格文であるが、これを省略して、他の部分を残しているものは不適格文となる。

(2) Speaker A : Is it possible to go there on foot ?

Speaker B : a. Yes, it is possible to go there on foot.

- b. # Yes, it is possible to go there ϕ .
- c. Yes, it is possible ϕ .
- d. # Yes, on foot (but the train is more convenient).
- e. Yes, possible (but not very wise).

a はすべて繰り返されているが適格文であり、c, e も適格とされる。b の go there を繰り返し、on foot を省略した文は不適格文となる。d は、A の「可能かどうか」の質問に答えずに、それ以外の箇所に答えているので不適格文である。質問の重要な情報を繰り返さずに、それ以外の箇所を繰り返したものは不適格になる。ところで、a は Yes 以外は前文を全て繰り返したものであるが、このような繰り返しが現れる状況は、かなり特殊なものと想定される。たとえば B が A の発話の内容をいちいちかみくだきながら確認する場合、あるいは、「徒歩でそこにいくことは可能です、だからどうだというのですか」という挑戦的な含みを持つ場合などである。

ここで、久野の省略順序の制約から、繰り返しの順序の原則を仮定することにする。

先行文における情報の新、旧、重要度の相対的關係からいって、繰り返しはより新しい（より重要度の高い）要素から、より古い（より重要度の低い）要素へと行なう。即ち、よ

り古い（より重要度の低い）情報を表わす要素を繰り返して、より新しい（より重要度の高い）情報を省略することはできない。

3. 原則の有効性

仮の原則の有効性を、牧野と、McCawley, Yamaguchi の例にあてはめて考えてみることにする。

牧野（1980：107 ff）は、ほとんど「反復」不可能な文として、a. 複文、b. 分裂文、c. 敬語、d. 等位構文、e. 常套句、f. 直接引用をあげている。これらの場合の不可能性を、牧野を参考にしてまとめると次のようになる。

a. 複文の主節の新情報だけを繰り返すと、その繰り返し文は適格であるが、従属節のような一般により古い情報が含まれると不適格になる。但し、前文の新から旧の順ならかなり適格文になる。b. 分裂文のように旧情報が含まれる部分が繰り返されると不適格になる。d. 等位構文の A and B は、後部の重みの観点からいえば、Bの方がより重要と考えられるので、より重要度の低い情報の A が含まれると、不適格になる。e. 常套句のように、最も古い情報が入ると、不適格になる。f. 直接引用で繰り返されたものがすでにより古い情報であるので、この繰り返しは不適格になる。

a-f の繰り返しのできない例は、上で考えた繰り返しの順序の仮の原則の、より古い要素に関する記述を取り除けば、原則適応が可能である。つまり繰り返しは、より新しい（より重要度の高い）情報を行なう、というだけで有効性は保たれることになる。

ところが牧野は、これらのほとんど不可能な種類の文には、例外的に可能な場合があるとする。3例（108-9, 76, 111）を引用する。

(3) A: "I will buy you a bike if you need one."

B: "Only because I need one?"

(4) A: "Where are you going when you die?"

B: "Where am I going when I die? Of course it's Heaven."

(5) A: "Could you kindly read this paper of mine and give some critical comments on it?"

B: "Could I kindly read that paper of yours and give some critical comments on it?"

牧野の説明をまとめると、(3) のように、再度強調するために従属節だけを繰り返すことは

できる。また（４）のように、Ａが挑戦であるなら、挑戦の挑戦で繰り返しが可能である。さらに分裂文の疑問文に対して、ことばを一語一語確かめながら答えるという特殊な状況で、例外的に反復がでてくる。敬語に関しても、もし反復されるとひどい皮肉になると説明される。

以上のことから、基本的には繰り返されない文が、もし繰り返されたときには、２種の場合が考えられることになる。つまり、旧情報だけが繰り返された場合と、前文がそのまま全て繰り返された場合である。となると、これらは仮の原則にあてはまらないので有標としてまとめることができ、その機能は、強調、皮肉、挑戦、ゆっくり確認するなどが考えられる。

敬語表現が全文繰り返されたときも同じように考えられる。本来丁寧なことばは強く聞き手を志向した表現であり、話し手と聞き手の社会的な関係を規定する対人的な機能を担っている。聞き手との関係のなかではじめて機能するわけであるから、これを繰り返して相手にもどすということは、逆にこの機能をぶちこわすことになり、相手の自分への敬意を揶揄し、皮肉の発話の力を持つことになる。

次に McCawley (1987: 253-55) と、Yamaguchi (1993: 242) から繰り返しできない例をいくつかあげて、その説明をまとめることにする。

(6) A: Goddamit, we'll be arrested by the police.

B: ?? Goddamit, we'll be arrested by *who* ??

(7) Bill: I'm interested, my friend, in collaborating with you.

Ed: You're interested, (*your/my friend,) in collaborating with me ??

(8) A: Take the boxes out to the garage, please.

B: ?? Take *what* out to the garage, please ??

(9) A: You've turned off the stereo, haven't you ?

B: ?? I've turned off *what*, haven't I ??

(10) Jim: Quite frankly, I'm the one who done it.

Tim: *Quite frankly, you're the one who done it ??

(6) 間投詞, (7) 呼び掛け語, (8) 文末の Please, (9) 付加疑問, (10) 文体離接詞のいずれも、話し手が伝えようとする主たる情報（命題情報）を担った表現ではない。(6, 9) は、客観的な命題内容を表わすのではなく、なんらかの形で話し手の主観的態度を表し、話し手に強く結びついた表現である。(7, 8, 10) は、呼び掛け語にしろ、Please にしろ、聞き手を志向した表現であり、また文体離接詞も、命題情報を伝える主文がどのように受け取られるべきなのかを聞き手に伝える働きも持っている。(6～10) は、命題内容を担う主文に付加されない単独の形であれば、繰り返しできる。またこれらは全て、主文に並列された構造を形

成すると説明される。

これらの繰り返しのきかない部分が主たる情報でないということは、つまり重要でない情報ということになり、基本的に繰り返しが難しいことになる。それでは単独で繰り返しが可能であるかということになると、実際はおこりにくいように思われる。その理由としては、これらは話し手の主観性を反映し、聞き手を志向する表現なので、もし繰り返されたなら、その繰り返し文のなかで、その表現が新しい発話者の主観を提示しているともとれる可能性を残すからである。したがって、解釈上、機能上の矛盾を引き起こすことになるので、単独の場合も繰り返しはおこりにくいと考えられる。

以上3カ所からの引用により、繰り返しの順序の仮の原則を修正することにする。

4. 繰り返しの順序の原則

まず仮にたてた原則は、「より新しい（より重要な）情報を繰り返す。より古い（より重要でない）情報は繰り返さない。」と修正される。これが繰り返しの順序の基本であり、無標の場合である。この場合の機能として考えられるのは、話し手と聞き手の間で、より新しい情報を繰り返し、その新しい情報を確認しつつ、その情報を主題化し、これに話を続けていくことである。そうすることによって、会話のスムーズな流れが保持されることになる。したがって、この種の繰り返しは、情報伝達を効率よく行なうという機能的な役割を担っていることになる。

より古い情報が繰り返しのなかに含まれるかどうか、有標、無標の境界になる。もしより古い情報が繰り返されるとき、またはより古い情報も込みで繰り返されるとき、これは有標になる。繰り返した人は、繰り返した発話そのものを問題にし、繰り返したということで、自分の評価、判断を含意させる。もっと極端な言い方をすれば、この繰り返しの場合、問題になるのは、繰り返した人の心的態度である。繰り返したものに対して、肯定的な態度をとれば、繰り返しが強調の働きをし、否定的な態度をとれば、挑戦、皮肉、非難を含意することになる。この繰り返した人の意図をもし間違って解釈すれば、会話はまともに進まないことになる。

これら有標、無標の2つの場合をふまえて、繰り返しの順序の原則を次のようにまとめることにする。

より新しい（より重要な）情報を繰り返す。より古い（より重要でない）情報は繰り返さない。より古い（より重要でない）情報が（も）繰り返されたときは、話し手のその情報に対する心的態度が問題になる。

5. 繰り返しの機能

ここで、実際に多用されるより古い情報が含まれる繰り返しの例文をあげ、その機能を考えることにする。より古い情報が含まれる場合は2種あり、一つはより古い情報のみを繰り返した場合、もう一つはより古い情報を含んで全文を繰り返した場合である。このような有標の繰り返し発話は、その繰り返された表現に対する含意が大切なポイントになってくる。

(11) 'Oh, I beg your pardon!' cried Alice hastily, afraid that she had hurt the poor animal's feelings. 'I quite forgot you didn't like cats.'

'Not like cats!' cried the Mouse, in a shrill, passionate voice. 'Would you like cats, if you were me?'
— AAI

前文の発話の複文従属節の一部を繰り返して、感嘆符が付加される。この場合は相手の使った not like cats という発話に対して、話し手のとんでもないという否定的態度を含意して、相手にもどす。相手のことばを利用しているだけに強い表現効果を持つ。おそらくは、話しことばではイントネーションなどで含意されるところが、書きことばでは、曖昧性を帯びるため、後続の文で、話し手が繰り返した時の声の調子が特定化され、感情が明示化されることになる。

(12) 'We won't talk about her any more, if you'd rather not.'

'We, indeed!' cried the Mouse, who was trembling down to the end of its tail. 'As if I would talk on such a subject! Our family always hated cats: nasty, low, vulgar things! Don't let me hear the name again!'
— AAI

前文の We のみが繰り返され、感嘆符が付加される。相手の使ったことばそのものを問題にし、We なんてとんでもないことだと自分の心的態度を込める。ここでもまた、話し手の繰り返した時の状況が、後続文で明示化される。

(13) a. Where can I buy pretzels at this time of night?

b. Where can you buy pretzels? At this time of night? At Barney's, of course.

— S & W (1981: 306)

(14) a. I'm tired.

b. **You're** tired. And what do you think I am?

— ibid.

対話相手の発話を全て繰り返すことにより、相手の発話を聞いた、理解したということを示唆したうえで、それに対する話し手の反応を示す。(13) は知っていて当然だぞという意味での非難を示し、(14) はお前だけが疲れているのではないという非難を含意する。

(15) Eliza : What's to become of me? What's to become of me?

Higgins : How the devil do I know what's to become of you? What does it matter what becomes of you?

Eliza : You don't care. I know you don't care. You wouldn't care if I was dead.

I'm nothing to you—not so much as them slippers.

Higgins : Those slippers.

Eliza : Those slippers. I didn't think it made any difference now.

— MFL

自分の発話をそのまま、あるいはヴァリエーションをつけて全文を繰り返すことは、その内容を相手に伝達するというよりは、むしろ繰り返されるものの重要性を強調したり、あるいは自分に言い聞かせるためのものである。相手が繰り返し述べて強調したものを、さらに繰り返すことは、そのものに対する否定的態度をさらに強化することになる。

最後の部分は、相手の them slippers を、それも言うなら正しくは Those slippers と言うべきである、とことば修正をする。そのことば修正を受けて、Those slippers と繰り返す。いわゆることば使用を教えるメタ的な用法である。

(16) Kate : What happened?

Annie : She ate from her own plate. She ate with a spoon. Herself. And she folded her napkin.

Kate : Folded—her napkin?

Annie : The room's a wreck, but her napkin is folded. I'll be in my room, Mrs. Keller.

Viney : Don't be long, Miss Annie. Dinner be ready right away!

Kate : Folded her napkin. My Helen—folded her napkin.

— TMW

相手のことばを繰り返し疑問符を付加する、エコー疑問文と呼ばれる例であるが、これは基本的に相手のことばが分かりにくかった、聞こえにくかったので、それを確かめるために質問するときに使われる。つまり内容を確認するために、内容を明らかにするために繰り返して質問する。さらに分かっている、理解できているが、それをあえて再び対話の場に出すことによ

り、相手の真意を問う。つまり自分は繰り返したものは信じられない、不適切である、関係ないと思っているが、発話した本人は本当にそうであると考えているのかと相手に質問する機能を持つ。

6. お わ り に

久野の省略順序の制約から、逆に繰り返しの順序の原則を仮にたて、いくつかの代表例にあてはめることにより、原則を定めた。これにより、先ず繰り返しの談話上の基本的機能はおさえられることになる。話し手は、対話相手のことばを繰り返すことによって、その繰り返したものを相手に伝達するという行為を行なっているわけではない。対話相手のより重要な、より新しい情報を繰り返すことにより、それを確認し、それにさらに新しい情報を付加し、スムーズな談話の流れを保持しようと努める。ところが実際の発話では、その基本的な場合をあえて無視した場合が多くみられる。この時は繰り返されたものを問題にし、それに話し手の心的態度、評価を含意して、対話者に再びもどすことになる。そこで、繰り返された、もとは自分のことばを聞いた聞き手が、そのなかに発話者の発語内行為を読みとる。もしこれを取り違えると、談話のスムーズな流れは阻止され、話し手も聞き手も会話がうまく運ばれていないと思うであろう。繰り返しは決して、文の冗長度を上げるためのものではなく、むしろ語用論的に重要な機能を果しているといえよう。

引 用 作 品

- AAI Lewis Carroll. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Oxford University Press.
MFL Alan Jay Lerner, *My Fair Lady*. Penguin Books.
TMW William Gibson, *The Miracle Worker*. Asahi Press.

参 考 文 献

- 久野 暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
Kuno, S. 1983. "Principles of Discourse Deletion." *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists*, 1982, Tokyo, 30-41.
福地 肇. 1985. 『談話の構造』大修館書店.
稲木昭子. 1993. 「会話における繰り返し表現」『追手門学院大学文学部紀要』第27号, 179-91.
McCawley, James D. 1987. "The Syntax of English Echoes." *CLS*. 23: 1, 246-58.
牧野成一. 1980. 『くりかえしの文法』大修館書店.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman Group Ltd.

繰り返しと情報構造

- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1981. "Irony and the Use-Mention Distinction." In P. Cole ed., *Radical Pragmatics*, 295 – 318. Academic P.
- Tannen, Deborah. 1989. *Talking Voices*. Cambridge University Press.
- Yamaguchi, Haruhiko. 1989. "On 'Unspeakable Sentences' : a Pragmatic Review." *J. of Pragmatics* 13, 577 – 96.
- . 1993. "Unrepeatable Sentences : Contextual Influence on Speech and Thought Presentation" In H. Parret ed., *Pretending to Communicate*, 239 – 52. de Gruyter.

1995年9月28日 受理